

命ある限り

山浦 英雄（静岡県八十代）

あの時、私は君に惨いことを訊ねてしまった。許してくれ。

「弟さんは、その後どうしたの？」

「五歳の体力では、生き延びることが出来なかった」と、君は悲しげに答えた。

昭和二十年八月九日。突如押し寄せたソ連軍の蛮行に、満州奥地の開拓者には、為す術が無かった。満州鉄道の社員だった君のお父さんは、混乱の中で、多くの人を列車で避難させることに懸命だった。気が付いたら、君達少數の家族だけが逃げ遅れた。

「安司、この線路に沿って、とにかく南へ向かって歩け。必ず日本へ帰れる港町へ出る。途中、修の手を決して離すなよ」

親子の別れは、慌ただしかった。君のご両親は職場を離れるわけにはいかず、九歳の君に幼い弟を託した。干飯と水筒を詰めた大人のリュックは重かった。幾日も歩いた。晴天の日ばかりではなく、夜は冷え込みがきつく、高粱畑に潜り込んで野宿したが、眠れなかった。弟は干飯を噛みくだく力もなく、どんどん衰えていくが、どうすることも出来ない。逃避行の十日目に息を引き取った。

あの時から七十七年経った。君は立派なエンジニアとして、人生を全うした。

今、再びロシアによるウクライナへの侵攻は、両国の主権の間

題に留まらず、人道危機や、地球規模の食糧危機、気候変動等人類の存亡に直面している。連日報道される悲惨な状況、特に瓦礫の中から救出されたあどけない子供達の姿に、心をえぐられる。

今、私達にできることは何だろう。無力感で途方に暮れているわけにはいかない。

そう、君がそうであつたように、命ある限り、きっと明るい未来があることを信じよう。

： 冬来たりなば春遠からじ ：

(特別編 準備秀實)